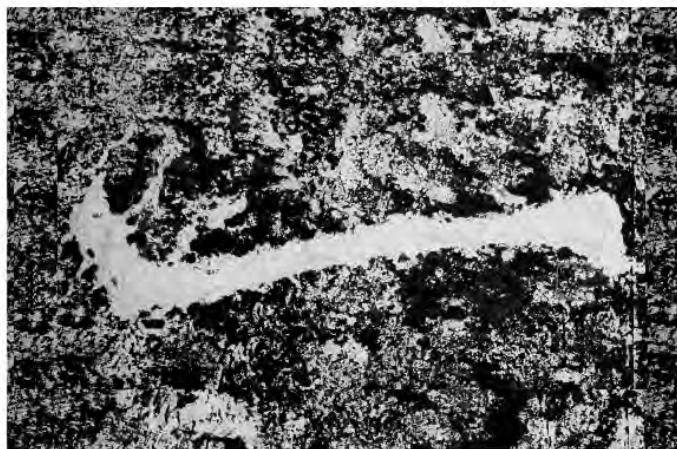


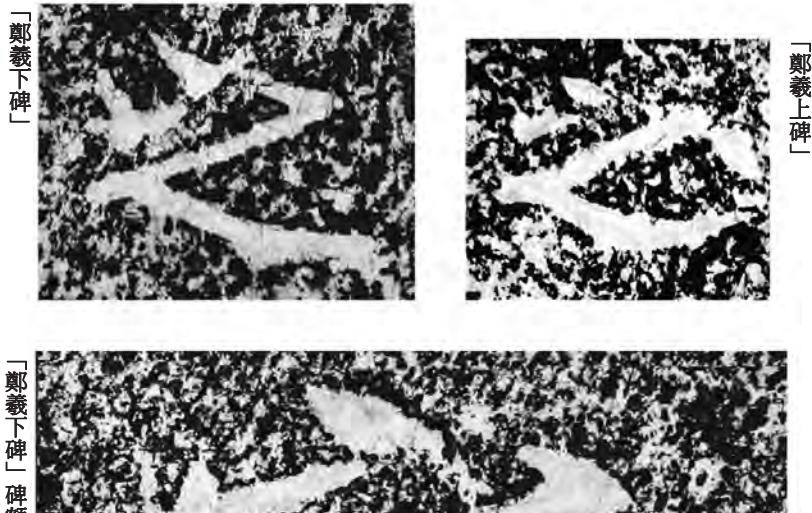
主図版①



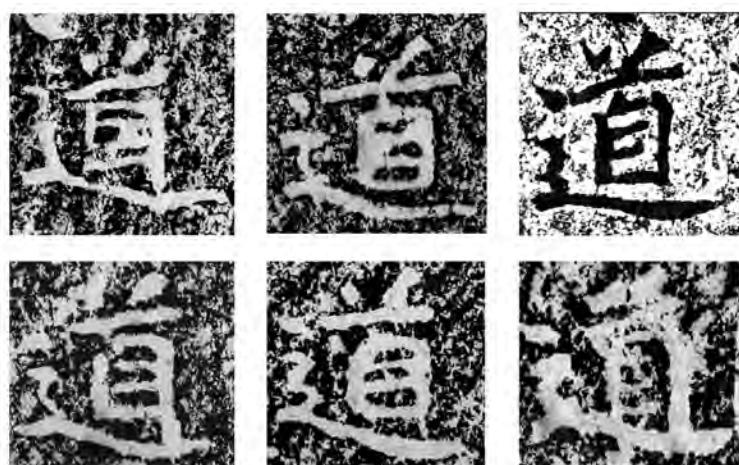
「書の古典観照」⑤

「六朝楷書」・②鄭道昭

図版②



図版③「鄭羲下碑」集字



鄭道昭の書とされる「鄭羲下碑」を始めとする碑刻は、全てが摩崖刻石です。山の大きな岩肌を整えて、文字が刻された。摩崖刻石は、西安の碑林の碑刻のように切り出され、碑面を丁寧に整えられた碑とは異なり、碑面が粗く、また長い間風雨に曝されてきた。こうした状況を考慮して、鄭書の文字を仔細に見てみよう。

図版③は、「鄭羲下碑」の本文の中から、集字した「道」字です。も文字の大きさが、大きくなれば字画より鮮明になります。図版②は、鄭道昭の刻石の「之」字三種です。最も大きいのは、「鄭羲下碑」の碑額の題字、次は「鄭羲下碑」の本文、やや小さいのは、「鄭羲上碑」から選び出したものです。大きくなるに従い字画は、鮮明になります。右頁には、「論經書詩」と「鄭羲下碑」から集字した文字を並べました。字画が鮮明なものを中心にしました。右上の「一」字の起筆、送筆、終筆は、鄭道昭の代表的な筆画を示しているのではなかろうか。

伊藤滋（書齋名・木鶏室）

書道芸術院

平成の群像 (2018)



第68回毎日書道展出品作

片岡豪峰書

〈今〉の自分



片 岡 豪 峰

で続けてこられたのは師の指導、書友の支えがあつてのことと自覚しています。

師の言葉「出品作品、君の〈今〉なれば…」

家の近くにホキ美術館という写実絵画専門の美術館があります。超絶リアルな作品群が展示してあります。よく写真のようだという表現が使われていますが、正真正銘の絵画でその質感たるやものすごいものです。何故関係ないような話から書きだしたかといいますと、写実絵画と写真を見るのと同じように、パソコンで打ち出す文字が如何にもきれいですが、やはり見る者に訴えるものは手書き文字の表情・個性が出ているものと思います。

昨年に教職を退きました。私学を含めると40年にわたり千葉県の高等学校で書道の教員として教壇に立ってきました。小学生のころ飯高和子先生に巡り合い、それから50年以上たちます。書道芸術院に出品し始めて45年になり、この間にはそれなりにいろいろありました。挫けそうになることも間々ありましたが、今まで不出品しない

の言葉になんとか励まされて続けてきました。教員になりたての頃、市川学園で同僚として指導をうけた能村登四郎先生の句を教員最後の夏の毎日展に3句書いて出品させていただきました。教員になりたての頃の思い、能村先生の思い出、30年以上の教員生活などいろいろな思いが交錯した作品でしたので、〈今〉の自分をと思い、掲載させていただきました。書としての魅力・力不足を実感しています。また、書道のことでやはり書いておきたいこととしては小學生のころから、一緒に続けてきた友、目良泰幽君が病に倒れ、現在リハビリを続けて書作の復帰を目指しています。彼の作品をもう一度見たいと思います。

現在、書道芸術院の事務所で主に書道芸術学生版の編集担当、全国学生展の担当を中心仕事をさせていただいています。様々な作品に触ることで自分を叱咤していま

書のひろば

理事長 辻 元 大 雲

全日本書道連盟夏期書道大学 盛況に開催 下谷洋子講師担当

恒例の全日本書道連盟主催夏期書道大学は8月3日～5日、池袋サンシャインシティ・コンファレンスルームにて開催され、漢字楷書・行書・草書・篆隸・かな・漢字かな交じり書の6科目を実施、連日満員の参加者で締め切り前にお断りまでなる盛況ぶりであった。

本院下谷洋子常務理事は「かな」を担当、「本阿弥切」の臨書をテーマに2時間半精力的に指導された。助講師には大辻多希子・木村東舟両氏、事務局員として小池蹊舟、事務局長として辻元大雲が連日運営に当たった。

第53回高野山競書大会表彰式 席上揮毫会も初企画で盛況

8月3日第53回高野山競書大会の表

彰式が金剛峰寺にて開催され、弘法大師賞、大臣賞、金剛峰寺賞各受賞者が参列して挙行された。大会審査長として辻元大雲、運営副委員長担当の種谷萬城両名が参列、挨拶審査報告などを行った。受賞者は全国各地から招待さ

れ、随行のご家族など多数参加で盛会であった。

今回初の試みとして大会役員による席上揮毫会が表彰式終了後行われ、辻元大雲(俳句)のほか、鬼頭墨峻大会副会長(漢字)、松井玉箏運営副委員長(かな)の3名が揮毫した。辻元大雲は即興の自作俳句「水蒸の鮮やかに舞ふ夏の堂」を披露した。

8月25日には高野山品川別院での関東地区展にて石飛博光、船本芳雲、松井玉箏、佐久間康之の各氏が揮毫し、多くの観客を魅了した。



席上揮毫風景

9月9日～15日の7日間、西安・敦

煌・上海をめぐる行程。本院からかな部会員賞受賞の九條純代、U23かな部会長(漢字)、松井玉箏運営副委員長(かな)の3名が選抜され参考する。体調に気をつけて大いに研修の実を上げてくださることを期待する。

第70回展記念毎日全国巡回半田展 赤レンガ建物にてユニークに

第70回展を記念して展開中の毎日全国巡回展は鳥取展に続き愛知県半田市「半田赤レンガ建物」を会場に8月18日～25日の間開催。明治31年(1898)にカブトビールの製造工場として誕生。横浜赤レンガ倉庫と同じ設計者(妻木頼黄)によるもので明治時代に建てられたレンガ建造物としては日本で屈指の規模を誇る。またビール工場の遺構としても現存数が極めて少なく貴重な建物といわれる。有形文化財、近代産業遺産として登録されている。現在は半田市が管理運営。

書展は展示スペースとして5室を使用、他はピヤホール、シアター、ショッピングなど。当時の壁面そのままの会場で、展示方法もユニークな発想で工夫されていた。

毎日展は現在各地方展を開催中で、是非ご高覧を。(巡回展は前号参照)

第54回書道芸術院単位認定 高知講習会開催

8月25・26日、高知市三翠園を会場

に四国支局主管にて開催。受講生は130余名、講師等役員を合わせ150名余と多くの参加者で盛況。折からの台風20号の直撃の後となり、主催者、参加者の苦労は如何ばかりであったか。

講師は左記の通り(内助講師)

- 漢字 半田藤扇(三浦鄭街)
- かな 木村東舟(松村くに子)
- 現詩 大平邑峰(赤澤東洞)
- 刻字 清水翠径(丸山筑峰)
- 前衛 倉林紅瑠(北村白琉)
- 原拓 種谷萬城(三浦鄭街)
- 院史 辻元大雲(片岡豪峰)
- 一般教養 渡部淳

(高知城歴史博物館館長)



単位認定講習会開会式

前衛書 (六)

大井 美津江

美を感じる心眼を

前衛書で最も大事なことは、「線質

います。

である」と前回に述べました。その線に人の心が表現されることも強調しました。

書とは、白の空間に線を通して自己を表わすのではないでしょうか。しかし、制作にあたっては美を感じとる心

6回の連載の場をテーマに、ことは、書歴60年になろうとする私に、書の原点を振りかえるよき機会となりました。

の眼、いわゆる鑑識できる眼を養うことが必要ではないかと思います。そのためには何よりも感動しうる心を培うことが大切だと思います。美しいものに数多く触れ、よきものを吸収し、思慮を深め、あらゆる「真の美」を求める

書の奥深さを実感し、後輩に作品制作をとおして書の美的伝統を伝えられる日々に、しみじみ感謝しております。今後も書の美を求めて、一步で邁進していきたいと思います。



大井美津江書

現代詩文書 (六)

小池蹊舟

文房四宝

—木筆に遊ぶ—

〈四宝の組み合わせ〉

書作品を制作する上で、欠かす事の出来ないものに文房四宝があります。特に、墨・筆・紙にはお世話になります。

表現したいものに、どのように墨・筆・紙を用いたらよいのか?用具により、同じ詩文でも異なった表現が出来ます。濃墨・

淡墨、剛毛・柔毛、画仙の厚さ等自分にあった用具を選ぶことも大切です。

〈木筆のおもしろさ〉

故種谷扇舟先生が晩年木筆を使って作品制作をしておられました。木筆の持つ強さ、素朴さ、破筆のおもしろさに引かれ、私も時々使用しています。

今回の掲載作品は、第60回毎日書道展に出品したものです。

現代詩文書は、明治以降の詩文を素材とし、様々な書表現が可能です。



第60回毎日書道展

小池蹊舟書

書に励み、②現代に生きている事を意識し、③詩文への思いや自然のリズムを大切に、④親しみ易さを忘れず、⑤筆に生命を通わせて、⑥文房四宝の組み合わせを工夫しながら、独自の書作に励みたいと思います。半年間の拙い繰り言におつきあい頂きました。



特集 第70回毎日書道展

国立新美術館 東京都美術館
7月19日㈭～7月25日㈬

第70回毎日書道展総評

辻元大雲

第70回記念毎日書道展は2月の運営委員会で主要役員など組織を決定、本院役員、会員が各部担当など幅広く活躍し、多大な貢献をしていただいた。

4月12日の事務局合同会議、5月14日、16日に会友公募の作品(未表装)搬入、25日～27日の鑑別、6月29日～7月1日の入賞審査、会員賞選考など順調に進行した。総出品点数は前年より81点減となり微減で止まった。U23の出品年齢を16歳以上としたことも影響していると思われる。U23だけに限ると69回展より372点の増となり、年齢を下げた効果が表れていると思われる。部門別ではかなが118点減と減少が大きく、懸念される。

今回展では審査部長を下谷洋子本院常務理事が担当、東北仙台展実行委員長に佐藤無極本院評議員が重責を担つた。運営委員として近代詩文書部小竹石雲、大字書部小伏小扇、前衛書部千葉蒼玄各氏が担当した。当番審査員は

かは既報の通り、全出品作品中より選考される文部科学大臣賞には日本書道美術院鬼頭峻理理事長が漢字部作品で受賞された。会員賞は記念展として各部1点増(篆刻部はなし)の32点が選考された。

本院から漢字部岩垣若翠(鳥取)、かな部九條純代(群馬)、前衛書部柳橋香仙(千葉)の3氏が受賞、昨年該当なしで寂しかったがリベンジを果たした。その他毎日賞以下各賞には次ページの通り記念展にふさわしい成果をいただき感謝。入賞入選された方々を大いに祝福したい。

70回展を記念して特別企画展示「墨魂の昂＝近代書道の人々」が国立新美術館一棟を使用して開催され、大きな反響を呼んだ。明治から昭和20年、戦前までの約80年間に活躍された文化人書作家(漢字・かな・篆刻を中心として)64人の作品を展示了。

今人気の西郷隆盛、大久保利通はじめ日下部鳴鶴、比田井大来、尾上栄舟、中野越南、中村蘭台(初世)など錚々たる方々の作品群は參觀者を圧倒する充実、見応えある展観であった。会期中

財団理事によるギャラリートークが7回開催され、7月18日に辻元大雲が担当200名近い観客で盛会であった。

・中国展
8月21日～26日
広島県立美術館

・北陸展
8月26日～30日
富山県民会館

・九州展
8月28日～9月2日
大分県立美術館

・東北仙台展
9月14日～19日
せんだいメディアテーク

・北海道展
9月26日～30日
札幌市民ギャラリー・大丸藤井

・東北山形展
10月3日～7日
山形美術館

・東海展
11月27日～12月2日
愛知県美術館ギャラリー

各地区では作品展示と共に顕彰式、祝賀会、揮毫会などがそれぞれの地区の特色を發揮して行われる。各開催地で本院会員諸氏が活躍され大いに貢献されていることも感謝しつつ総評としたい。

・四国展
8月8日～12日
愛媛県美術館
・関西展
8月15日～19日
マイドームおおさか

会員賞



岩垣若翠
(漢字部)

の気持ちで一杯です。作品は劉方平の五言律詩を文字の大小をつけながら、潤渴や余白の美しさなどを意識して仕上げました。作品決定の日、先にお亡くなりになった竹本龍汀先生に、「線がいいね」と一言頂いたのが心に残っています。先日、私の師匠の岩垣翠城先生の墓前に報告に行きました。先生から、「お前がなあ、会員賞か驚いたな、まあ頑張んなさい」と言われたよくな気がしました。

今後は新しいことへの挑戦を目指として、さらに研鑽を積み前へ進んで行こうと思います。今後共ご指導くださいがけない会員賞を頂き、身に余る光栄と厚くお礼申し上げます。

ご指導頂いた名越蒼竹先生には感謝の気持ちで一杯です。作品は劉方平の五言律詩を文字の大小をつけながら、潤渴や余白の美しさなどを意識して仕上げました。作品決定の日、先にお亡くなりになった竹本龍汀先生に、「線がいいね」と一言頂いたのが心に残っています。先日、私の師匠の岩垣翠城先生の墓前に報告に行きました。先生から、「お前がなあ、会員賞か驚いたな、まあ頑張んなさい」と言われたよくな気がしました。

かな部 九條純代



九條純代
(かな部)

第70回記念展の時に会員賞を受賞させて頂き光榮なことと感謝致しております。これも偏に下谷洋子先生の熱いご指導、そして書景会の皆様のお陰と心より感謝申し上げます。

由緒ある寺に嫁ぎ、書は常と感じ、幼き頃から親しみのある「かな」を学びたいと思いました。故下谷東雲先生に師事し万葉かなの美に魅了され、また洋子先生のダイナミックな表現の中に緻密な構成、巧みなテクニックに惹かれました。先生の線の美を追求研究する姿勢には学ぶ事が多く、ご指導いただけることは有難いと思っております。

今回は肋骨を骨折してしまい、思う線が書けず心が折れそうになりました。先生から「古典古筆の臨書をしてから作品を書きなさい」とアドバイスを頂き、改めて臨書の大切さを痛感しました。更なる精進向上に努めます。有難うございました。



特集：第70回毎日書道展

会員賞



柳橋香仙
(前衛書部)

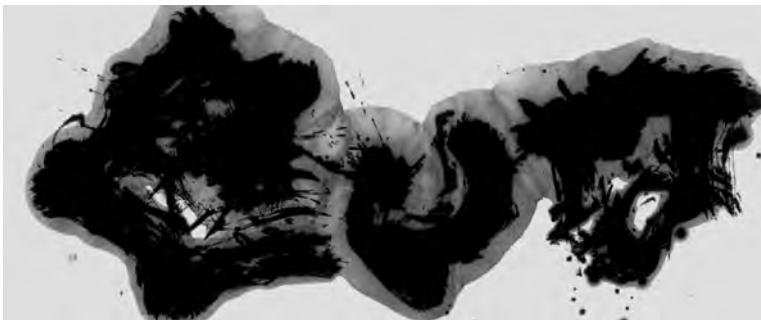
この度は、会員賞を受賞させていただきありがとうございました。これも偏に板垣洞仙先生をはじめ諸先輩・書友の皆様のお蔭と感謝申し上げます。板垣先生には高校書道部から現在まで50年にわたりご指導いただいております。

前衛書を始めた頃は、濃墨を中心でありますたが、現在は古墨・青墨等を宿墨して、紙も画仙紙から洋紙・鳥の子紙などを使い淡墨作品を制作しています。

また、国立新美術館での席上揮毫に挑戦させていただき、大変貴重な体験

となりました。
今回の作品「射による」は、紙面から光が放たれる様子を思いを込めて書きました。

これからも皆様の御指導をいただきながら、歩みを進めてまいります。ありがとうございます。



前衛書部 柳橋香仙

第70回展書道芸術院出品数（公募・会友）

書道芸術院	漢字		かな		近代詩文書	大字書	篆刻	刻字	前衛書	合計
	I	II	I	II						
本年度	216	225	142	157	440	203	0	68	419	1,870
前年	215	216	135	149	488	217	0	62	401	1,883
増減	1	9	7	8	-48	-14	0	-6	18	-13

第70回展書道芸術院受賞者数

賞名	漢字		かな		近代詩文書	大字書	篆刻	刻字	前衛書	合計
	I	II	I	II						
会員賞	1		1						1	3
毎日賞	2	1	1	1	4	2		1	3	15
秀作賞	5	2	0	4	7	4		1	8	31
佳作賞	4	9	3	8	15	8		3	15	65
U23毎日賞			1						1	2
U23新銳賞					1					1
U23奨励賞					3	1			1	5
合計	11	13	5	14	30	15		5	29	122

毎 日 賞



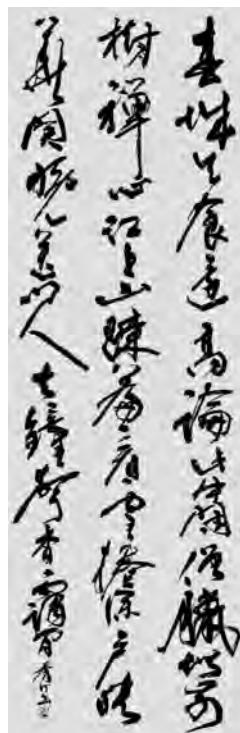
漢字部II類 高安翔琴



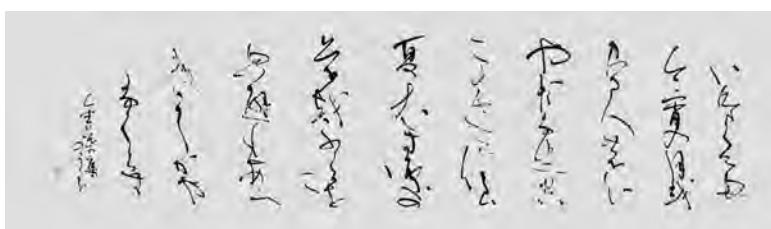
漢字部I類 竹浪叙舟



漢字部I類 高岡秀汀



かな部I類 利村郁子

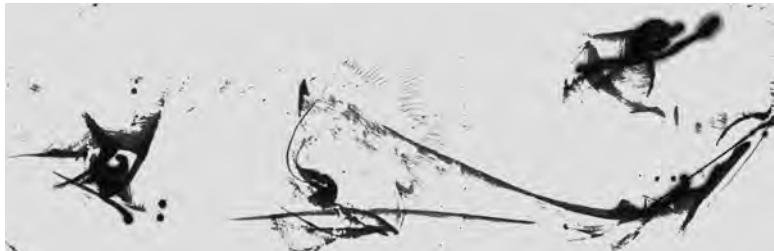


かな部II類 山田静枝

毎 日 賞



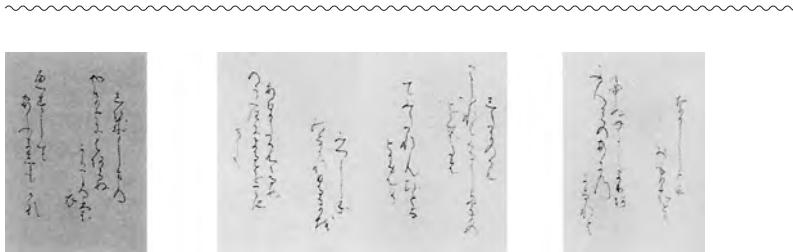
毎 日 賞



前衛書部 相内珠莉



前衛書部 青木かよ



かな部I類 茂木絢水



前衛書部 木暮千晶

U23毎日賞



前衛書部 伊藤二千翔

秀作賞受賞者

佳作賞受賞者

前衛書部

平田悦子 大野礼子 新井虹雪
大鹿洋江 大庭幸石 佐藤陽子
工藤山房 石田 香 廣瀬幸枝
鶴淵亜希 遠藤華香 山崎 恵
北澤利杜 高橋栄杏 遠藤紅杏

・漢字部（I類）
薬師寺玄真 森田藤谷 上田琴秀
徳岡翠江 中島恵華

・漢字部（I類）
一谷春窓 小川白柳 山崎早月
望月考鳴

・漢字部（II類）
大山和歌子 牧川逢扇 種谷悠輝

安藤麗華 伊藤里祥 加藤雅芳

佐々木一峰 小山内谷玲 武田華邦

栗原信子 真下美佐代 大崎香織

・かな部（I類）
茂木絢水

伊藤二千翔

・前衛書部



役員の先生方

U 23 毎日賞

・かな部（II類）
松本泰泉 新谷風泉 関口ヤヨエ
知野久美子 高橋はる江 戸来益江

中川紅蘭 藤原三枝子

・前衛書部

高橋奎媛

・近代詩文書部

菱沼範子 佐藤光耀 奥川麗流

湊 溪花 須田真舟 菅原房江

千田春月 佐藤華雪 酒井如雲

吉田景輝 岡崎翠園 安藤裕子

梶井鷹春 永見史皇 掛水美翠

中原雪華 旭 筏陽 本田賀艸

北口松星 小島白蓮

・前衛書部

田村詩乃

U 23 奨励賞

・近代詩文書部
山口佳保里 矢作実里 後迫里保

大字書部

・漢字部（II類）
波多祥舟 柚野聖柳 天満瑠蘭

新田雄山 白井真理 佐藤華炎

小松美惠

葛西楊舟

前衛書部

星野成美 石黒和喜 宇都宮趙辰
小此木白洋 岩上郁子 後藤恭
大友紅蓉 佐藤紅茜

・刻字部
佐々木眸心 野登蒼山 赤羽蘭徑



出品者懇親会 毎日賞のみなさん

集王聖教序

東晉

王羲之

(唐・672年集字)

③

漢字研究部臨書課題

II (半紙普通判・縦使用) 左記の法帖より何文字臨書してもよい。

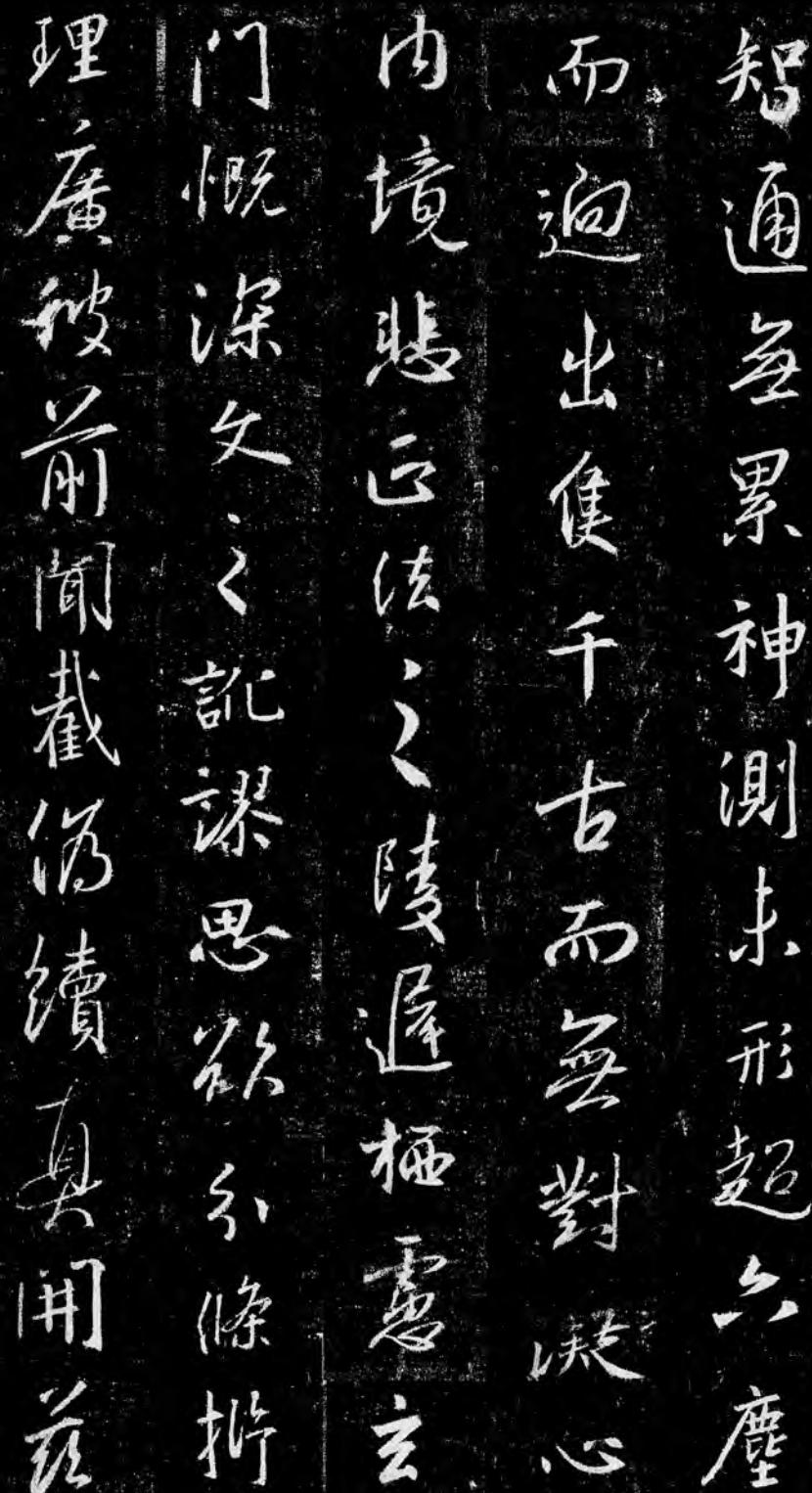
特別研究部臨書課題

II (毎日展公募サイズ以内・縦横自由)

当該古典の左記掲載
部分以外も可。

〈解説〉 王羲之は、中国の山東省鄆鄆臨沂の名門貴族の出身で、永和7年(351)に右軍將軍・会稽内史の地位についたことから、王右軍ともよばれている。その書は唐の大宗皇帝に酷愛され、「書聖」と仰がれて、後世の人々に多大な影響を与えた。東晋時代における王羲之は、旧来の書風を大きく変革した先駆者で、各書

体に精通し、特に楷書・行書・草書の三書体を芸術の域にまで高めた人物といわれている。この集王聖教序は、僧懷仁が唐の内府に所蔵されている王羲之の真跡から集字したものである。王羲之の真跡が一つも現存しない今日、蘭亭序とともに王羲之の面目を伝える重要な古典であり、行書学習の規範とされている。(編集部)



(掲載図版72%に縮小)

※落款を必ず入れる。署名、もしくは〇〇臨(押印のみも可)

智通無累。神測未形。超六塵而迥出。隻千古而無對。凝心內境。悲正法之陵遲。極深文之訛謬。思欲分條析理。廣彼前聞。截偽續真。開茲

古筆鑑賞

(174)

関戸本古今和歌集(云藤原行成筆)③

をぐろさきみつのかじまのひとな
らば宮このつとにいざといはま
しを
みさぶらひみかさとまうせ宮
ぎのゝこにした露はあめ
にまされり
もがみがはのばればく多
いな船のいなにはあらずこの月
ばかり

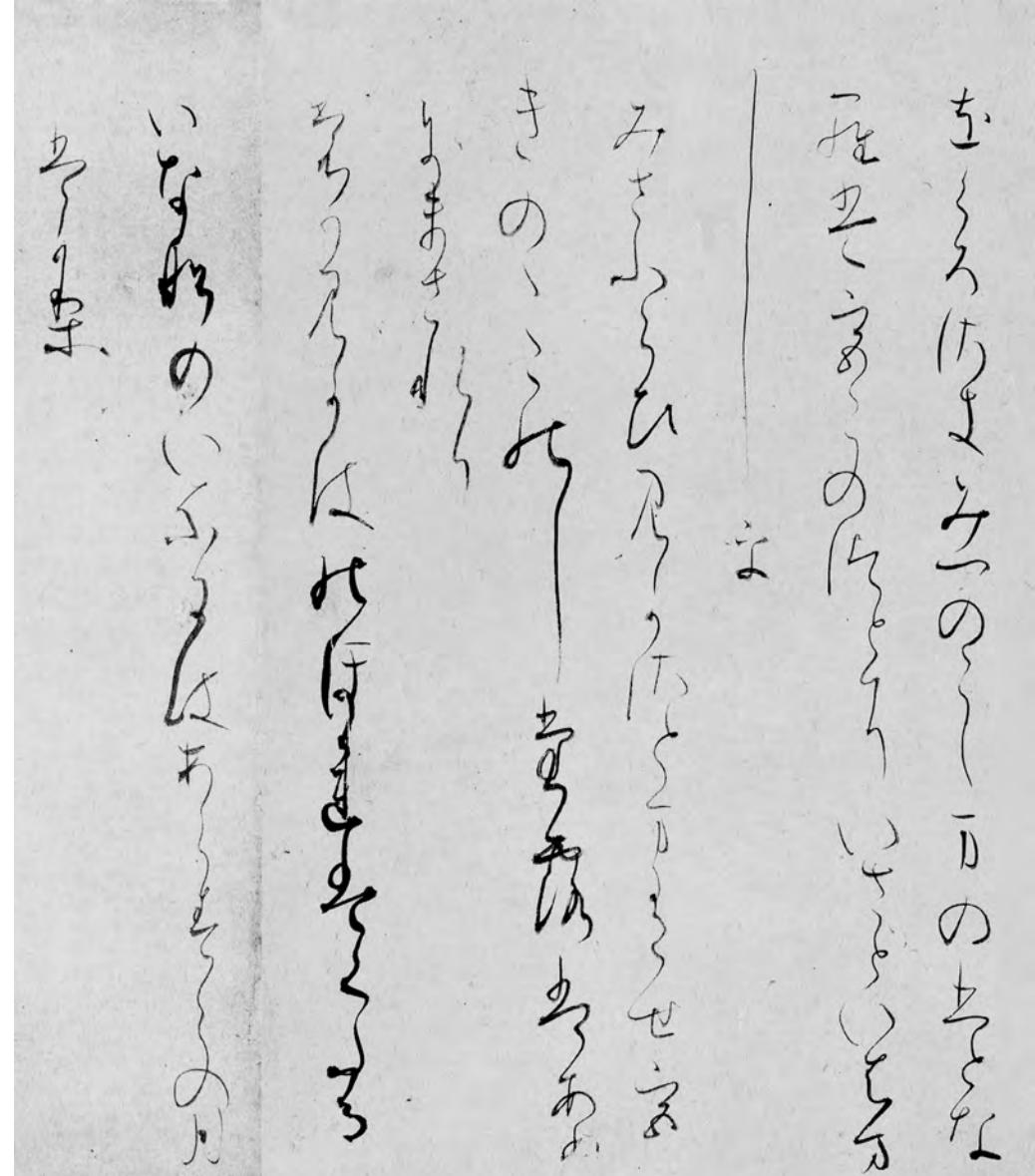
〈解説〉

関戸本古今集は、歌一首を2~3行に並列式に書写されている。詞書・読人・行の高低の布置・墨色の変化等によって一行を整え、行と行との響き合いを考慮している。また、歌の書き出し部分は静かに入り、途中で墨継ぎをしてから次第に筆圧を強く、しかも運筆に加速度を付けて盛り上げていく方法が多く見られる。上記の写真図版(東歌・巻二十)は、歌の末尾の行の変化、字数との関係が見事に表現されている。三首それぞれの3行目の行脚が2文字(しを)、5文字(にまされり)、3文字(ばかり)を配した構成で、関戸本古今集の構成のすばらしさが表出された部分である。

(編集部)

※落款を必ず入れる。署名、もしくは○○臨(押印のみも可)

(個人蔵)



※古筆は原寸(以上も可)で臨書しましょう。

※掲載図版は75%に縮小。

かな研究部
臨書課題

(半紙普通判(料紙可)・縦長に使用)
別紙を裁断して貼付も可。半機紙は半紙サイズに切って使用のこと。
上記の古筆の掲載部分より歌一首以上を書く。(全篇も可)

特別研究部
臨書課題

(毎日展公募サイズ以内・縦横自由)
上記の掲載以外も可。

習い方解説 (六)

小竹石雲

沖靜得自然
(じょうじょうとくしぜん)

私の担当最後になりました。マ

ンネリ化して、一度リセットした

い時に私はこうした遊びをしてい

ます。剛い荒い筆でとうてい漢字

にはむかないものであえて挑戦し

てみました。参考手本としては不

適当だと思いますが、気のむくま

ま筆を走らせ、筆と一体になれる

機会を窺い知ることも大切です。

用具を知れば書きたくなります。



冲 静 得 自 然 よみ（じょうじょうとくしぜんを得る）

書体=自由

尾形澄神

(禅語)

心到天真
(心天眞に到る)

心を常に純粹にする、の意。



書体=楷書

顔真卿晩年の楷書碑の中でも、真蹟に最も近いとされる顔氏家廟碑を現代感覚でアレンジした。蚕頭燕尾と呼ばれる技法(蚕の頭のよくな起筆と、燕の尻尾に似た收筆)は、顔真卿が最晩年に辿り着いた究極の用筆である。

横画は藏鋒、または鋒先で紙を突くよう起筆し、筆先を吊り上げて送筆。転折で鋒先を立て直し、再び藏法で鋒先を深く沈め開鋒する。縦画は外側だけ膨らませることを意識すると、懷が狭くならない。心の二画目、到の最終画收筆は、鋒先を来た方向に戻すような感じで反転させ離筆した。顔真卿のはねが普通の反り方とは違うのは何故かを考え、また、真卿が篆書の用筆を取り入れているとの説を考慮すると、この用筆に到る。

心到天眞 よみ(心天眞に到る)

習い方解説 (六)

奥田瑞舟

ひさかたなかあきもかぢ
色の千しほや望月の影
(武者小路実陰)

(正義)

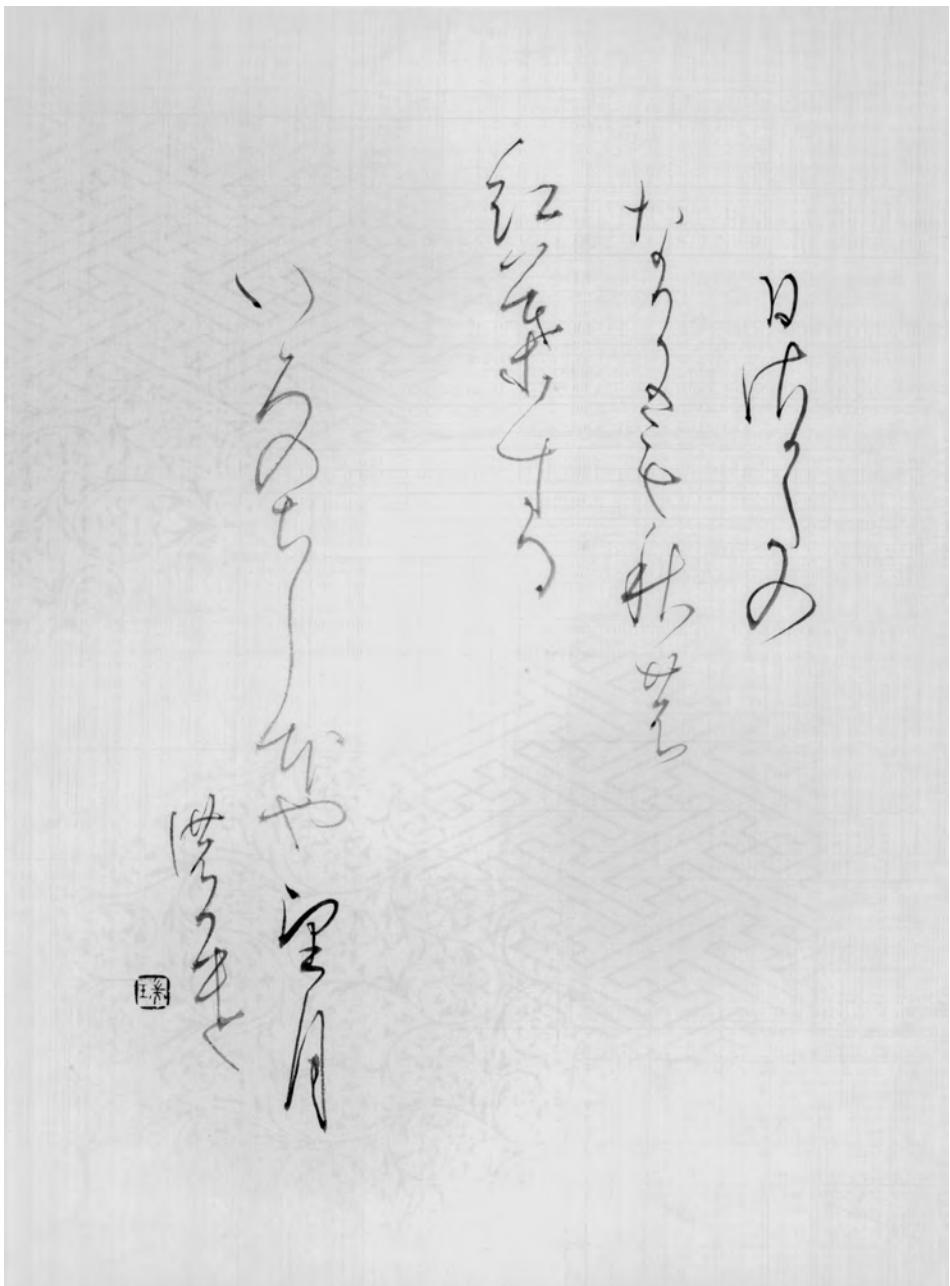
今は特別な構成ではなく、歌
のリズムからも自然で表現しやす
い形と思います。いち毛の小形
の筆を根本まで墨付して書きまし
た。

昇段試験を拝見して、臨書作品
は丁寧で美しく書かれているのに、
創作作品との差があり残念な結果
の方が多いと思いました。自分で
創作するのはとても難しい…の声
も聞きます。

散らし書き創作の簡単な取り組
み方を書きます。7月号・9月号
の規定に、創作希望の歌をはめこ
み、「ながれ」という連綿(つづ
けてかく)をつくる。かなのは
連綿する中で徐々に引き上がる。
濃淡(潤渴)の位置も参考にしま
しょう。歌を替えて繰り返し挑戦
して下さい。素材の数が多ければ、
構成も多数出来ます。

よみ方 久(日佐)方(可多)の中(な可)に(尔)も(毛)秋の(農)紅葉する
色(いろ)の千(ち)しほ(本)や望月の(濃)影(可遣)

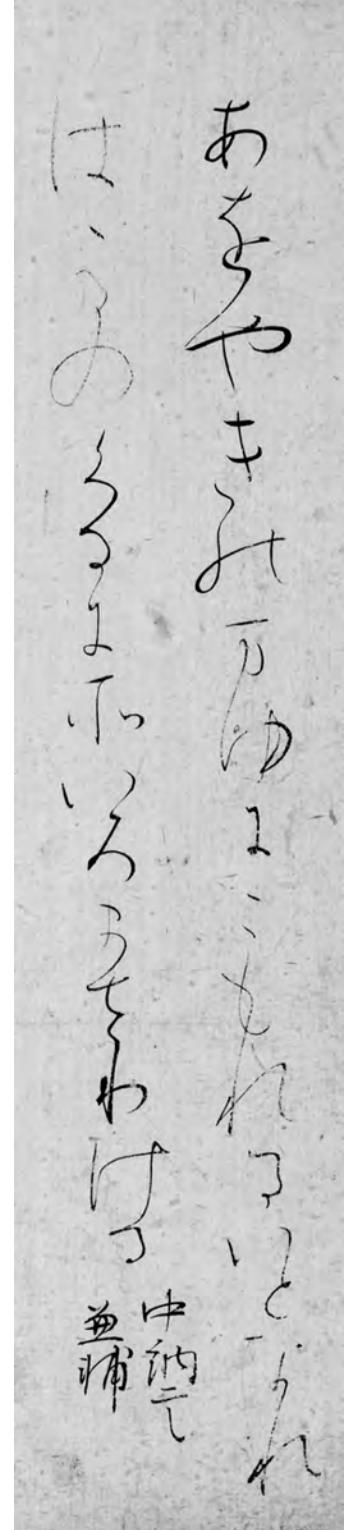
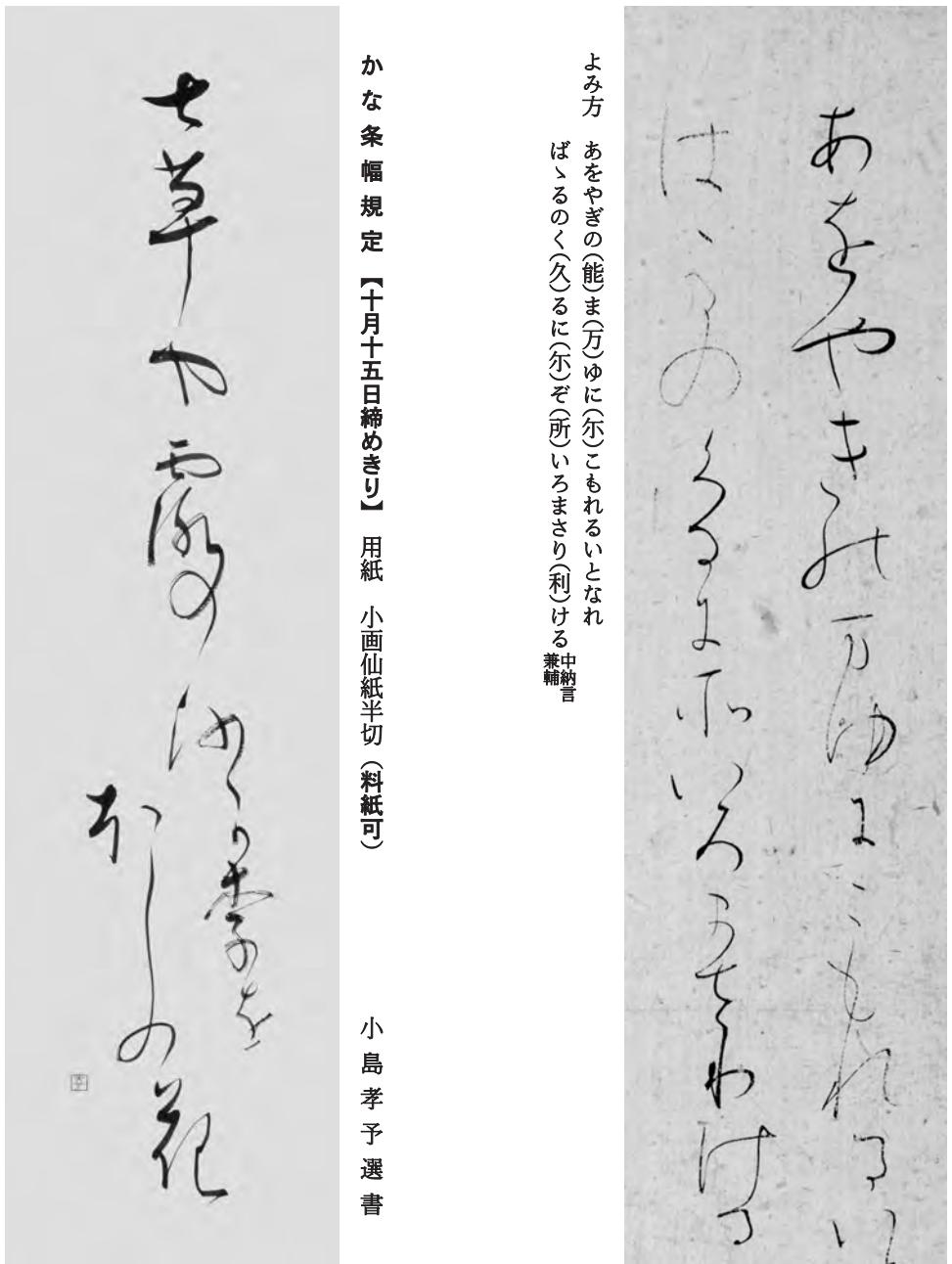
創作



かな規定 秀級以下【十月十五日締めきり】用紙 半紙タテ $\frac{1}{2}$ (料紙可) (たて32センチ・よこ12センチ)

掲載写真の和歌を臨書する。または部分(2字以上の連綿)を臨書する。

粘葉本和漢朗詠集
(掲載写真拡大111%)



習い方解説 (三)

小島孝予

七草や露の盛りを星の花
(上島鬼貫)

「秋の七草に朝露がたっぷりと
乗って星のようだ」という意。

「東の芭蕉、西の鬼貫」と言わ
れた松尾芭蕉と並ぶ俳人、上島鬼
貫の俳句です。

作品の清楚な情景を古典的に描
けるよう、変体かなと連綿線を考
慮して仕上げました。漢字とかな
のバランスから生まれる余白の動
きを大切に表現しましょう。

よみ方 七草や露の盛(沙可)り(季)を星(本し)の花

創作

*タテ形式に限る

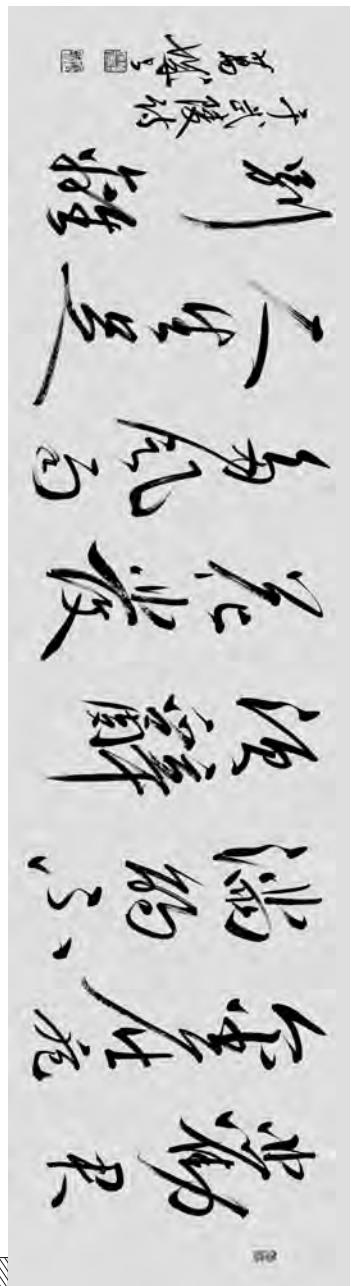
漢字 条幅 規定 初段以上 【十月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

種谷 萬城 選書

種谷 萬城 選書

習い方解説 (六)

種谷 萬城



勸君金屈卮 满酌不須辭 花發多風雨 人生足別離
(君に勧む金屈卮 满酌 辞するを須はず 花發けば風雨多し 人生別離足る)

書体=自由

出品券
貼付位置

今月は横形式の行草書です。縦長の条幅は、縦方向への流れが強調出来ますが、横形式の横披では、字幅の変化による横方向への振幅が見所です。行書と草書を織り交ぜ、大小、疎密、曲直の変化と余白美を工夫し、創作を試みて下下さい。張旭・壞素・蘇軾・米芾・黃庭堅・董其昌・王鐸などの個性豊かな名品が参考になります。

*ヨコ形式に限る

漢字 条幅 規定 秀級以下 【十月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

川島舟錦選書

習い方解説 (六)

川島舟錦



書体=自由

古典の臨書や鑑賞で習得した技法や感覚を生かして、自分自身の思いを文字に託して自在に表現できたら、何と素敵なことでしょう。書きたい詩文や語句の表現、ねらいを考えて、筆の太さや毛の質、墨の濃さ、紙のにじみ具合などを選定していきましょう。大変な作業ですが、試行錯誤しながら慣れていくことが大切かと思います。

一枕鳥聲残夢裡 半窓花影獨吟中
(一枕の鳥聲残夢の裡 半窓の花影獨吟の中)
(陸游)

習い方解説 (六)

ペン字規定【十月十五日締めきり】

大隅晃弘選書

若者は名は杜子春と
いって、元は金持の息子
でしたが、今は財産を
費ひ尽して、その日の暮
しにも困る位、憐な身分
になつてゐるのです。

「杜子春」より 晃弘書

用紙＝はがきの大きさ(14×10cm)、白色のもの、黒インク使用のこと

書体＝自由

横書きでの書作です。本来の日本語表記は縦書きですが、日常では横書きの様式が多く、その表現を研究する必要があります。行に対して、文字を「中心揃え」か「下揃え」に統一し、仮名を小さめに書きましょう。行間が詰まると読みづらくなります。学校教育において「書写」・「書道」と称されるように、書が実用性と芸術性の二面を有していることは、書文化の最大の特徴といえるでしょう。書写的学習テーマは、文字を正しく書き、場に応じた様式や紙面構成を体裁よくまとめてることです。本誌のペン字規定の意義は、この線上に立場を置きながら、暮らしの中に根差した実用書の在り方を模索することだと思います。

情報化的進む中で、些末な技術に臆することなく、積極的に「手書き」を実践することが重要だと考えます。限り無い知識量や膨大な生産性を求めるならば、もはや人工知能に依存するほかないでしょう。だからこそ、「手書き」という行為を一つの文化と捉え、自らの書字に対する自尊心とアイデンティティ、相手に対する敬意などが、日頃の実用書に含まれているということを自覚する必要があると思うのです。

※縦書きも可（用紙は縦長に限る）
※落款（自分の名前）を必ず入れる。

横書きでの書作です。本来の日本語表記は縦書きですが、日常では横書きの様式が多く、その表現を研究する必要があります。行に対して、文字を「中心揃え」か「下揃え」に統一し、仮名を小さめに書きましょう。行間が詰まると読みづらくなります。学校教育において「書写」・「書道」と称されるように、書が実用性と芸術性の二面を有していることは、書文化の最大の特徴といえるでしょう。書写的学習テーマは、文字を正しく書き、場に応じた様式や紙面構成を体裁よくまとめてることです。本誌のペン字規定の意義は、この線上に立場を置きながら、暮らしの中に根差した実用書の在り方を模索することだと思います。

情報化的進む中で、些末な技術に臆することなく、積極的に「手書き」を実践することが重要だと考えます。限り無い知識量や膨大な生産性を求めるならば、もはや人工知能に依存するほかないでしょう。だからこそ、「手書き」という行為を一つの文

今月の

ホープ作品
各部総評 No. 687

漢字部 師範 小林 舟穀
リズム感溢れる大胆な運筆が紙面に躍動感を与え、潤滑の変化もバランスよくまとまった作。

◎漢字部総評 上級簡素な点画の書き出しに苦労した作多し。運筆のリズムや太細の変化など工夫したい。下級も同様。（大雲評）



漢字条幅部 師範 長谷川千峰
書き慣れたかななりリズムで温かな趣をよくつかんでいる。墨色や潤滑も美しく自然体の爽やかな作。

◎かな条幅部 総評 変体がな阿・
満に誤字あり、字母の確認が必要。
めぐりの連続法はかな特有のもの、
理解し修得したい。（洋子評）

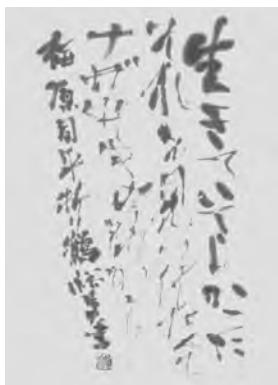
かな条幅部 師範 長谷川千峰
書き慣れたかななりリズムで温かな趣をよくつかんでいる。墨色や潤滑も美しく自然体の爽やかな作。



瑞華

◎漢字条幅部 師範 新行内瑞華
運筆に渋滞がなく軽快。参考手本の特徴を捉え、爽やかで、表情に富んだ線が魅力的。着実な作。

◎かな条幅部 総評 変体がな阿・
満に誤字あり、字母の確認が必要。
めぐりの連続法はかな特有のもの、
理解し修得したい。（洋子評）



漢字条幅部 師範 新行内瑞華
運筆に渋滞がなく軽快。参考手本の特徴を捉え、爽やかで、表情に富んだ線が魅力的。着実な作。

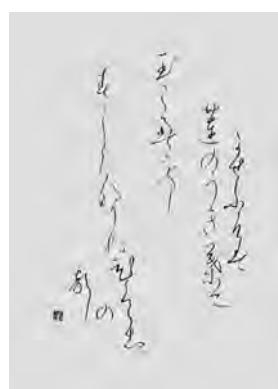


瑞華



かな部 師範 橋本 紅霞
手本の研究と歌意への思いが深く、持ち前の表現力で穏やかな世界を描き切った。格調高く美しい。

◎かな部総評 流れが悪く、文字過小の作品が多く残念。スケール大きい作品を目指にし、創作の意識の再確認を望みます。（明子評）



橋本 紅霞
手本の研究と歌意への思いが深く、持ち前の表現力で穏やかな世界を描き切った。格調高く美しい。

◎かな部総評 流れが悪く、文字過小の作品が多く残念。スケール大きい作品を目指にし、創作の意識の再確認を望みます。（明子評）

現代詩文書部 特選 斎賀 裕美
現代詩は言葉の表現である。この作品で梅原司平「折り鶴」を聴いた。詩意を彷彿させる作である。

◎現代詩文書部総評 墨色と線質には幾万もの美がある。もう少し研究し楽しんで欲しい。（素雪評）



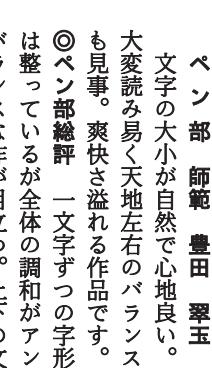
前衛書部 特選 本田 美雪

線の力強さに好感が持てる。多彩な線質で調和のとれた作品となっている。

◎前衛書部総評 今回秀作が多かつたが、さらに創造力を發揮し斬新で楽しい作品を望む。（仙岳評）

ペン部 師範 豊田 翠玉
文字の大小が自然で心地良い。大変読み易く天地左右のバランスも見事。爽快さ溢れる作品です。

◎ペン部総評 一文字ずつの字形は整っているが全体の調和がアンバランスな作が目立つ。上下の文字の配列に注意を。（雪枝評）



今月の

特別研究部優秀作品(特選)

選評 辻元大雲 三浦鄭街 平川峰子 倉林紅瑤

前衛書 (蓮紅社) 浅野彩紅書



浅野彩紅書

60×137cm

臨書 (大雲)

阿部恵泉

頭窟載以合生四時無形潛
寒暑以化物是以窺天鑑地
庸愚皆識其端明陰洞

「集王聖教序」

阿部恵泉臨

174×55cm

「月光」

◆前半部と後半部が響き合
い、よく空間をとらえた。

◆独特的淡墨で墨のじみは
ないが、余白も美しく新鮮
な作品。 (紅瑤評)

◆大きな動きだが、美しい
墨色とマッチして爽やかな
雰囲気を醸し出す。題名と
作品がぴったりと合ってい
る。 (鄭街評)

◆墨色が魅力的。筆の運速
が墨の滴りを生み出し渴
筆部に動きを与えている。

現代詩文書 (八戸) 市川紫泉



市川紫泉書

60×180cm

「古屋恵美子の詩」

◆運筆に緩急抑揚をつけ、
自然な流れの中に結体の妙
を發揮した臨書。原帖の特
徴をよく捉え、格調の高い
作に好感。 (大雲評)

(大雲評)

◆拡大臨書は特に線質への
深い追求が問われる。強さ
と広がりを与えて妙。一部字形
要一考。 (大雲評)

(鄭街評)

◆拡大臨書は特に線質への
深い追求が問われる。強さ
と広がりを与えて妙。一部字形
要一考。 (鄭街評)

(峰子評)

◆大胆な構成にゆるぎのない自
信の筆画。ところどころに澄ん
だ細線を入れて気力充実した作
品になった。 (峰子評)

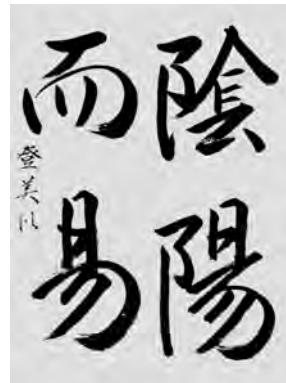
◆横形式の上部を大きくあけ、
下部に重さを与えた。墨量の変
化が違和感なく明るさが一際目
立つ作品。 (鄭街評)

◆横作品として、中央部の盛り
上げが効果的で、構成のすばら
しさが表現している。特に前半
の太細・潤滑の変化が巧妙。

(紅瑤評)

選評 小浜 大明

今月のホープ作品



鈴木 登美

漢字研究部 特選 鈴木 登美

れました。そのため選考にも苦慮させられました。選外の作品の中にも取り上げたい臨書

秀作です。その上法帖の特徴を的確に捉え、それを表現するに足る技法を修得しています。又、無理のない自然な運筆も大きな魅力の一つです。

◎漢字研究部総評

今回の古典は多くの人が周知の書であり、よく臨書されるものと見え秀作が多数寄せら

め、品格に乏しく感じられる作品になってしまったものと考えます。



舟久徹 智江 雅
楓子子 景春 芳

る花梨 千遊
り子香秀 綾枝 子仙

真和久祥 美道
智子子仙 扇千子

白奎直 敦和 啓
泉山子子子子

かな研究部
(関戸本古今和歌集)

選評 佐藤希雲

今月のホープ作品



下津舟楓

かな研究部 総評 原本より大きめにまとめているが、かえって関戸本の強さや迫力がよく表現されている。正確な字形と生き生きとした筆勢がこの作品の魅力である。

◎かな研究部 総評 小さく書いたものは作品効果が薄れしており、残念な結果となった。「日本名筆選」等、活用されたい。



哲シ優
ゲ
子子子

香清良
舟耀泉

紀幹春
子生華

永順嘉
葦子江

正八誠八椿菊玉
秀 戸和生翠月松
伊市石石安新青
藤川崎川藤井木
佳美 代惠葵
英紫 代惠葵
子泉雨子子子郷
正大前樹玉治高水大もた一卯澄 竜竹光明秀大大清奥た墨大文大千正白 た八
月雲橋原松田崎海雲くか宮春 泉原漢昭歌抽雪月田か花雲筆雲葉華鶯
松増堀春早長萩根根中戸樋鶴高高泉代嶋嶋椎佐鶯境小小小黒熊草菊加江梅井
丸切田坂谷原津岸林部泉田橋橋水田 与 名藤山野林林口柳谷刈地柳口津木上
愛佳幸勝梅千綾飛み清雪雅佳幸雅龍葉祢由光陽美和純晃智竹紫眞泰日佳
石子雲美艸峰子龍子香風葦裕子苑泉宝子香子子梢子風代子葉蘭華峰夏悠子山雲

かな研究部 成績表

京明祥祐や宗春高蓮長琇玉立紅玉春上青 正八た八蕙芳京蒼附澄正青明澄も白こ澄華高京光
橋漢韻紫ま苑汀崎紅月韻松会精風松汀泉峰 華生か街書峰蘭橋陽中春華峰漢春く鶯だ春祥だ
吉吉山山茂富松本平林橋辻千田田多高平鈴杉柴篠猿佐坂齊近込金金加鹿小小岡大宇植板五飯東浅川
田田川田口木野浦田山 本 田烟中田草 木浦田渡々本藤藤山城杉藤島澤川部木野田垣五十島
千 満 さ美 寿久子 恵木 佑鶴幸 律絢塗玉美大奈紅洋白美耶美代杏睦幸洋美眞美里早江松美智春裕和輝藤歩華紅青江
子子恵京子水枝江雪子子霞子子心子子右惠美苗彩春艸峰菜子子峯瓊佳悠雨鳳栄子子
千静春光竹澄八や蒼樹大こ千大蘭正彩正東白梓琇華樹大白玄八梅白高高A東正誠 ゼ竜Aや花八正千大千水
葉紅汀彩美春街ま原原阪だ葉雲鼎華 華向扇江韻祥原阪鶯空雲桃流真I 総華和 春泉 Iま舞街華葉阪葉海水 村
渋佐櫻葉齊斎紺小小河高小木岸菊菅神川加加葛乙尾大大大櫻梅生萬鶯鶴字岩今伊伊石石生飯飯荒阿青青會
谷藤々田田藤藤山野林鳥野武橋地野田元納藤 野幡形鶯西塚田山田澤井瀬村藤東藤渡川川駒田泉川久木木本
木 かふる 原 真 由 爽典茱順雅恵秋智紅暉一由和久美春李琴楠祥貴夷京悦翠津晴秋光洋裕隆玉松勇
愛靜和龍智翠桂つ舞遊萩み恵玄く綾東 静典茱順雅恵秋智紅暉一由和久美春李琴楠祥貴夷京悦翠津晴秋光洋裕隆玉松勇
華子貞舟香子え夢山江子子城ら音子杏子代子仙子方美光美霞子美美子子綠名舟麗園泉子子径子洞花影子泉華枝月介
こ竹蓮幸高高あ調生白幕白澄琇生前澄千京上蘭正さ東は白土泉大青さ倉小秀高祥秀生桂蹟青書玉 土高誠扇澄書春 A弘
選だ美紅扇真崎か布大露張鶯春韻大橋春葉橋泉鼎華つ向せ珠氣会阪峰つ吉映水真紫畠大月韻峰游川 気崎和筆春游汀 I
外 86 吉横遊山山矢本武宮松松増真牧別深平春早林林浜島長西永中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中
名野山佐本岸口吉藤下村島崎田塩野府堀山岡部 田山谷山澤田西西島江嶋澤淵賀井村脇内橋根木田宮谷條行司下水田
氏名略 桜蘭紅梅奈登明蕙樂陽翠拓華栄清信清彩聰 雅美よ芝久莫瑠時恵玉豊よ 恵亞美宏春晴智千徹代利祥玉翠三瑞咏代紀子
佳舟雅香美江香睦翠子舟海秀子次子洗華春朗子子香子龍美子子泉作子勝子希惠子華翠子代子子風枝光郎華艸子子

治正華 東白鶯鼎草 大雲
佳 作 50書 佳作 鶯鶯吉山森森守三浦
山ゆかる将藤真友直津道子り太玉紀香子子

かな研究部 特選 下津舟楓

入

選 50書

知

美

由

介

32

昨年「書道芸術院創立70周年記念ウイーン展」および「第20回記念国際交流ワイン書道展」は平成29年(2017)10月18日～25

日、ウイーン市ヘルナルス市民大学、日本大使館広報文化センターの2会場にて盛大に開催されたことは既に報告した通り、大きな成果を収めて終了した。国際芸術文化交流に大きな力を發揮している書道芸術院ならではの誇るべき成果であった。

5年ごとの記念事業として行ったウイーン展に併催された20年間継続して開催されている「国際交流ワイン展」は、これまで本院四国支局の谷脇梅翠先生の公私にわたる大変なご貢献により継続され、これまで本院四国支局の谷脇梅翠先生の校長として3年間務められたことを契機として帰国後も交流を継続され、特に書道を通じての文化交流に力を注がれ、「国際交流ワイン書道展」とウイーン市民を対象としたワークショップを毎年開催され、昨年20回記念の節目を迎えた。谷脇先生のご意向もあり、これを契機に道芸術院に移管して運営を引き継ぐこととなつた。理事会のご承認をいただき新たな運営を進めることとなつた。ご理解とご支援をよろしくお願いしたい。

第21回書道芸術院 国際交流ワイン書道展

(スロバキアワークショッピング) 概要

・会期 平成30年(2018年)10月23日(火)～31日(水)

・会場 在オーストリア日本大使館広報文化センター

・出品者 書道芸術院財団役員(顧問、理事、監事、評議員、参事)から出品協力者に依頼及び訪欧団の院展審査会員

・作品 半切1／2／1／3 框装・軸装

・出品協賛費 15000円(表装料含む)

・旅行費用など詳細は別紙「国際交流ウイーン展」旅行募集のご案内参照(院事務所にご請求を。)

・旅行申込締切 9月20日(第2次)

・取扱い旅行社 每日新聞旅行担当 堂本暁生、吉野輝

TEL 03-6265-6968
・訪欧団 団長 辻元大雲
副団長 下谷洋子
訪欧希望者
・日程 10月22日(月)午前成田空港発
23日(火)午前陳列、午後ワークショッピング、席上揮毫(担当者のみ)
24日(水)午前、午後2回ワークショッピング、席上揮毫(担当者のみ)



、席上揮毫(担当者のみ)訪欧団員は終日ウイーン市内観光

25日(木)朝ウイーンからスロバキア、プラチスバに移動。

午前学生対象ワークショップと席上揮毫、午後大使館にて一般対象ワークショップと席上揮毫(担当者のみ)、訪欧団員は市内観光

26日(金) プラチスバ旧市街半日観光、午後ウイーンへ移動。

27日(土)午後成田空港着夕刻ウイーン空港から成田空港へ

28日(日)午後ウイーンへ移動。

29日(月)午前、午後2回ワークショッピング、席上揮毫(担当者のみ)

30日(火)午前、午後2回ワークショッピング、席上揮毫(担当者のみ)

31日(水)午前、午後2回ワークショッピング、席上揮毫(担当者のみ)

第21回書道芸術院

国際交流ワイン展 今秋開催へ